

英語音「強勢リズム」習得のための実践的研究

山 田 昇 司

朝日大学 英語研究室

Practical Research to Acquire the Stress-timed Rhythm of English Sounds

YAMADA Syouzi

Department of English, Asahi University

Summary

In order to make intelligible the spoken message in English, the first thing to do is to acquire the stress-timed rhythm, which is the basic feature of English sounds. This article examines the effective tasks that are necessary for learners to acquire such rhythm. Concretely speaking, what kind of tasks in what order should teachers give to students to motivate them and keep their motivation going? The task model adopted here was the one that Ms TERASIMA Mikiko, professor of Asahi University, employed in her 2011 first semester classes. The three-step tasks she used for her classes are called “Rhythm Reading(Group Test)”, “No Break Reading(Group Test)” and “Expressive Reading(Individual Presentation).” But actually the class practitioner unintentionally adopted a little different three steps, which was “Kana Reading(Individual Test),” “Rhythm Reading(Group Test)” and “No Break Reading(Individual Presentation).” Although the given tasks lacked in the amount of rhythm reading practice, compared with Prof. Terasima, they successfully showed the effectiveness in acquiring the English sound features. In addition, the individual presentation in the third step contributed to overcoming the learners’ shyness and fostering their ability to speak in public. One more thing that should be noted is that there was mutual corporation, direct or indirect, among the students in every step of these tasks. In conclusion, these tasks were proved to be “the most difficult but most motivating tasks,” i.e. an application of the idea of Zone of Proximal Development advocated by a Russian psychologist L.S. Vygotsky.

1 はじめに——学習者の可能性を最大限に引き出す音声課題とは？

私たちが情報を受け取る方法としては、目から受け取る文字情報と耳から受け取る音声情報がある。本論では英語における音声情報を取り上げ、その音声伝達にとって重要な英語音特有の「リズム」⁽¹⁾を習得する指導方法の考察を行う。

具体的には、学習者が意欲を持続させうるタスク（課題）の中身とその配列方法を検討することになるが、このタスクは学習者が自分にとって難しすぎると思えばあきらめて取り組まないし、また易しすぎてもそれに取り組む価値を感じずに捨て置かれることになる。学習者にやってみようと思わせる易しさと同時に、やる価値のある、すなわち自分の力を伸ばすことができる難しさを合せ持つ課題とはどのようなものであろうか。またそのような課題をどのように配置・配列すれば学習意欲を喚起かつ持続させて、その英語音習得に至らせることができるであろうか。

そのような課題を寺島隆（2007）は「やればできる最も困難な課題」と呼んでいるが、これはヴィゴツキーの「最近接発達理論」に由来する。ヴィゴツキー（2001）は「共同のなか、指導のもとでは、助けがあれば子どもはつねに自分1人でするときよりも多くの問題を、困難な問題を解くことができる」と述べ、自分ひとりだけでできる現在のレベルと共同・指導によって到達したレベルの間を「発達の最近接領域」と呼んだ。この領域はその人が持っている成長可能性の範囲と言い換えることもできるだろうが、寺島隆吉氏は英語教育においてもその可能性の上限にまで到達させる質と量を持った教材を学習者に与えることを主張し、それを「やればできる最も困難な課題」と名付けたのであった。

寺島氏は英語の音声指導におけるこの課題については、その理論と実践の全体像を寺島（1996a, 1996b, 1996c, 1997a, 1997b, 1997c, 2000, 2002）の中で明らかにしているが、散文における音声指導においてはくりズム読み→合わせ読み→表現読み>という形で定式化し、その追実践報告としては寺島（美）（2008）がある。また、寺島（隆）氏の岐阜大学における実践を記録した新見（2009）も参考にした。

本論で検討する実践は、筆者が寺島美紀子氏（本学教授）の2011年度前期の音声指導の実践を追試したものである。それゆえ、最初に氏の実践の概略を紹介し、次に筆者の実践の様子を語りながら上記のテーマについて検討していく。

(1) 藤井（1986）は「英語の基本的言語リズムは音節の長さではなく、強勢と強勢との間の時間的長さがほぼ等しいことによる。つまり、強く発音される箇所がほぼ同じ間隔を置いて現れるというリズム形式である。これを「強勢のリズム」(stress-timed rhythm) という」と述べている。寺島（2000：10）は、教育現場では「個々の音」にこだわりすぎて、英語にはこの基本的言語リズム stress-timed rhythm があることを知らない学生を大量に生み出していると主張している。寺島氏はさらに「個々の単音の発音が少々まちがっていても前後の関係さえあればコミュニケーションは成立するが、stress の位置がちがうと全く相手に通じない」と述べて、英語の音声情報伝達におけるリズムの重要性を指摘している。

2 “Can you believe it?” と評された音読プレゼンの授業

私が寺島美紀子氏の「音読個人発表」の実践を知ったのは、昨年の鹿児島県高校教育研究講座「英語部会」(2011/8/7)のときであった。講師は寺島隆吉氏(国際教育総合文化研究所所長、元岐阜大学教授)で、「原発事故と英語教育—メディア情報をどう読み解くか」というテーマで話をされたのだが、その話の中で美紀子氏はその年の前期に行った授業の一端を紹介されたのであった。

この実践では学生が47行にも及ぶ長文を教室の前に出て読み上げている。これだけの長さの英文を一気に音読することは、本学の学生のみならず他大学の学生においてすらあまり経験したことはないのではなかろうか。しかもそれを教室の前に出てプレゼンするのである。さらに付け加えるならば、本学の学生の多くは高校時代、英語が大嫌いがかつ大の苦手なのである。

このように考えれば、寺島隆吉氏がこの実践を“Can you believe it?”と評したことも首肯できる。同じ職場で教える私自身もこれを聞いたときは「そんなことが本当にできるのだろうか?」と信じられない気持ちでいっぱいになったことを覚えている。私はその後、寺島美紀子氏からその実践の詳細について何うことができ、ぜひ自分でもこの実践を追試してみたいと考えた。幸いにも氏が前期に用いた教材一式を使わせてもらえることになり、私はその年の後期の授業でさっそくその追試を行った。次節ではまず寺島(美)2011前期実践の概略を紹介する。

2-1 寺島(美)2011前期実践の概略

2-1-1 使用英文—“Chernobyl Catastrophe : 25th Anniversary of World’s Worst Nuclear Accident”

使用した英文は米国の独立系放送局 *DemocracyNow!* が2011年4月26日に報じたもので「チェルノブイリ事故25周年」を特集している。二人の医師が出演したこのインタビュー番組の主な内容は次の通りである。

1. 記録映画『チェルノブイリ・ハート』：子供たちの現況
2. パターソン医師：無防備な除染作業、消される被爆記録
3. シャーマン医師：石棺から漏れる高放射能、進まぬ新石棺建設
4. パターソン医師：広島400倍の被害、後世にも引き継がれる影響
5. 25周年行事でのロシア人環境保護活動家の話
6. メドベージェフ・ロシア大統領とオバマ・米国大統領のスピーチ
7. パターソン医師：原子力の3つの危険、どこにも逃げ場のない核惨事
8. シャーマン医師：全生物への影響、ベラルーシでは健康な子供は20%
9. パターソン医師：不当な被爆許容限度量の引き上げ

これらの主要見出しを見るだけで、チェルノブイリで起こったことと日本でいま進行していることが恐ろしいほどに符合することに気づく。さらにまた、将来日本を襲うであろう悲惨な未来をも予言する深刻な内容を持っていることも分かる。

とくに現在のベラルーシの子どもたちの健康に対するシャーマン医師のコメントには胸衝かれる思いがした。—What do you do with a society if 80% of your population is sick? Who are going to be the artists and the musicians, and the scientists and the teachers, if your population is sick? 日本の歴史上最大の危機に直面していると言われる我国の現在と未来について考えるために、いま読むべきものはこれ以外にはないと感じさせる内容である。

2-1-2 読解プリントの教材化手法—英文の語義を与えるソフトの使用

この英文の教材化には「訳振りソフト」が用いられており、英文の下には単語の意味が与えられている。したがって辞書引きの必要はほとんどない。授業ではその英文に記号付けしながら英文構造を確認し、センス・グループ毎に区切ってフレーズ訳をしていく。このような手順を踏むと、英語が苦手な学習者であっても Authentic な英文を読むことが出来るのである。

2-1-3 読解から音声指導へ——「リズムよみ」「通し読み」「表現読み」

いま述べたような「訳振りソフト」を使った読解の授業については私もこれまでに実践したことがあったのだが、寺島(美)実践ではその読解だけに留まらず、さらにそこからリズムよみ練習をへて学生に個人音読発表をさせている。学生たちが音読した英文は全部で47行にわたり、所要時間はおそらく5分を越えるものだったと推察される。また、実践された2つのクラスではほぼ全員が「音読個人発表」に挑戦している。

2-1-3-1 「読みガナ」のない「リズムよみプリント」 ※ 資料添付

本節ではこの音読発表に導くまでの手順について説明する。この実践が行われたのは週2コマの授業なので前期合計30時間ある。最初の9時間は別の教材の読解などに充てられたが、その後の15時間がこの英文“Chernobyl Catastrophe”の読解に、そして最後の6時間が集中的に「リズム読み」「通し読み」「個人発表(表現読み)」に割り当てられている。

この音読は読解が終わった英文の一部(2-1-1節でしめした8の部分)を読むもので、「リズム記号」と「フレーズ訳」が与えられたプリントが作成されている。リズム読みプリントにはふつうは「読み仮名」が付けられていることが多いが、このプリントにはそれが付けられていない。その代わりに英文の下に立ち止まり訳(センスグループ訳)が書かれている。

2-1-3-2 相互援助で「発音できる」ようになる

音読対象の英文は段落（4行前後）ごとに区切られている。「リズム読みテスト」に先立ってまず教師の模範朗読が行われるが、この間学生は自分の読めない単語にカナを打つ。次にグループ練習に入ると、相互に教え合ったりグループから教師に伝令が飛んだりして全ての学生が正しい発音を学ぶ。音読の個人発表は暗唱ではなく英文の音読なので、学生は発音に不安のある単語にはカナを付けて発表に備える。

段落ひとつずつをグループで読む「リズム読みテスト」が終わると、今度は「通し読みテスト」に移る。このテストは元々は「英文全部を通して読む」ことからそう呼ばれているのだが、実際の授業においてはいくつかの段落をまとめて読むことが多い。というのは、英文全てを読むテストだと、1グループのテストに時間がかかりすぎて列待ちの時間が長くなりすぎるからである。

本実践においても3～4段落をまとめてよむ「通し読みテスト」が行われている。なお、このテストもグループ単位で実施されるので、最初の「リズム読みテスト」と比べると難易度がかなり高くなる。実際のテストにおいては、完全に通して読み切れないグループも出てきたが、合格基準を弾力的に運用してやり気を失わせないようにしたということであった。（合格基準をどのようにサジ加減したらいいかについては、寺島隆吉（1997c）所収の「指揮者としての教師」が参考になる。）

2-1-4 「音読プレゼン」の風景

音読発表のときの様子については「授業開始前からペンを叩きながら練習していた者もいた」「前で読むときに緊張のあまりプリントを持つ手がぶるぶると震えていた学生がいた」「一番上手に読めると目されていた学生がなかなか発表に出てこずに周りから催促されて前に出てきた」というお話をご本人から伺った。なお、評価に関してはおおまかに「○」「◎」のようにつけ、制限時間などは特に設けなかったということであった。

2-1-5 試験時間90分を全て使って試験に取り組む学生

最後の試験には音読した英文の記号付けとフレーズ訳が出題された。定期考査期間の試験は60分しかないので、定期考査直前の授業時間内に試験を行っている。学生たちには90分の持ち時間をめいっぱい使ってこのテストに取り組んだ。辞書を片手に脇目もふらずに答案に向かい終了チャイムまで席を立つ者は一人もいなかったようだ。

なお、私が本学でこれまでに見てきた60分の定期考査の試験においてさえ、このように全員の学生が試験時間をフルに使うことはきわめて稀である。通例は退室許可時間の30分をすぎると答案を出し始めるものが次々と現れ、終了チャイム時まで残る者はきわめて少数になる。

以上が寺島（美）2011年度前期実践の概略である。私が氏にいろいろお尋ねして分かった範囲でまとめたものなので不十分な点がいくつかあると思うが、全体のおおまかな感じはつかんでもらえたのではないかと思う。

3 2011年度後期における山田の追試

3-1 「新形態リズム読みプリント」の驚き

さてここからは私自身の実践について述べる。私はこれまで読解用に用いた英文を音読させることはあまりなかった。そうしなかった一番大きな理由は、リズム記号と読み仮名の付いたプリントを作ることはなかなか大変な作業なので、それにかかる時間と手間を惜しんでいたことがある。そしてまた一方では、音読指導は散文ではなくもっとリズム感のある韻文を使って行えばいいのではないかという考えも私の中にあっただ。ただ、実際には4年前に読んだ教材（散文）ではLL教室の設備を生かして独自に作成した音声ファイルを聞かせて音読テストを行ったことがあったし（山田2008）、この年の前期にはMichael Mooreの演説（リズム感のある散文：*DemocracyNow!* 20110307）において記号カナ付リズム読みプリントを作って音読発表をさせてはいたのだが、*DemocracyNow!* 20110426のようなインタビュー記事（散文）においてリズム読みプリントを作って音読テストを行った経験はなかった。

そのような実践の到達点に留まっていた私にとって、鹿児島講演で紹介された新形態「リズム読みプリント」とその実践の成果には大きな驚きを感じた。

3-2 後期授業の構成

本論のテーマは「音声指導」であるが、その実践の理解には「読解」も含めた後期授業の全体像も示す必要があるので、次節ではそのことについて手短かに述べることにする。

3-2-1 「三分割」で授業を構成

通常の1コマ90分の時間配分は、以下の(1)(2)(3)に示したようになっていた。担当した6つのクラスのどこでも授業は「資料映像・音声・書籍の紹介」で始めたが、読解については、クラスの状態に応じて、「記号付けを学生にさせたところ」と「教師がスクリーン上に映した記号を転写させたところ」に分かれる。

(1) 資料映像・音声・書籍の紹介……点呼も含めて15～20分

(2) 英文の読解……45～50分

| | |
|---|---|
| { | 経営学科1年①／法学部1年② → 小グループによる記号付け発表 |
| | 法学部2年③、3年④／経営学科2年②、3年③ → 教師が示す記号付けの転写 → フレーズ和訳「机列順」発表（教師はそれを板書して、ときおり解説） |

(3) 段落単位のテスト「カナ読み」「リズム読み」……20～25分

この授業スタイルは、日によって構成部分に若干の長短はあったが、ほぼ一定していた。そしてこのような一定の型の中で、(1)様々な映像や資料を見せ、(2)英文法の幹である語順の違いを繰り返し教え、(3)英音法の幹であるリズムを体得させていった。

3-2-2 学びを復習・総括する節目の設定

このような1コマ1コマの授業の繰り返しの途中に、学んだことを復習・総括するための「中間和訳テスト&レポート」という節目を設定した。また、週2コマ30時間ある長丁場のクラスの方には、「中間和訳テスト&レポート」に加えて、さらに「音読発表1回目」「音読発表2回目」という課題を追加して配置した。

<週1コマ15時間のクラス>

8時間目：中間和訳テスト&レポート

14時間目：音読個人発表&最終レポート

15時間目：最終テスト「和訳過程再現問題」

<週2コマ30時間のクラス>

9・10時間目：音読発表1回目

14時間目：中間和訳テスト&レポート

15・16時間目：音読発表2回目

28・29時間目：音読発表3回目、最終レポート（29時間目）

30時間目：最終テスト「和訳過程再現問題」

当初の私の授業においては学期末だけにレポートを課していたが、そのとき一番残念に思ったのが、学生のレポートの中におもしろいものがあったとしてもそれを他の学生と共有するチャンスがないことであった。この中間レポートを書かせるようになってからはそれを時間中に読みあげたりコメントを加えることが出来るようになった。

3-3 「カナ読みテスト」の考察

いま述べたことから分かるように、「追試」とはとっても寺島（美）実践とは異なるところがいくつかある。そのひとつに「カナ読みテスト」を実施したことがある。次節ではその点について述べる。

3-3-1 思い込み

実のところ私は、寺島（美）実践においては「リズム読みプリント」により仮名が書き込まれていないことから「カナ読みテスト」が行われているものと思い込んでいた。本論を書き始めてから気づいたことであるが、このようなテストを実施しないことはすでに2008年度の授業実践が紹介されている寺島（美）（2009：32）において述べられている。

「リズム読み」は、はじめはクラスで一斉に発音練習するのだが、グループに分かれると途端に読めない単語が出て来る。それをひとつひとつ聞きに来ては単語の下にカタカナを打ち、ようやくグループの練習に入る。一斉では読めていても、自分たちで読もうとすると読めないことがわかるのだ。グループの誰かが聞きに来て、他の学生たちに教え、練習してから発表にやってくる。

私がそのように思い込んだもうひとつの理由は、寺島（1986a）の中で見た「カナよみ→そらよみ→リズムよみ」という言葉の記憶があったことにもある。しかし今回そのテキストをもう一度見直してみると、元々このテキストは自学自習用に作成されたもので、それらの用語は自学者が歌の暗唱にたどり着く過程にあるひとつの学習内容を示すものとして用いられていることが分かった。また寺島（1986b）にある定時制の授業実践の記録の中にも「カナ読みテスト」は出ていない。

3-3-2 一対一で対面する時間

さて、このような勘違いから始めた「カナよみテスト」ではあったが、学生たちは結構このテストを楽しんでいたように感じる。簡単なテストなので多くの学生は一回目で合格して早々と教室を出て行くのだが、読めると思ってカナを付けずに本番に臨み、例えば population という単語を「ポピュレーション」と読んで不合格となる学生もいる。合格の時には「はい、合格、おめでとう！」、間違ったときには「残念！そこは〇〇と読む」と宣告されて列の後ろに並ぶ。簡単そうに思えるがまた同時に気の抜けないテストでもある。列待ちの学生たちはいつも教えあたりプリントを見つめて練習したりしながら自分の番を待っていた。

このような対話をする中で自然と学生の顔と名前が一致してくる。私の授業のなかで教師と学生が一対一で顔を合わせる時間は、この他にも「呼名による出席点呼」「机列順の和訳指名」があるが、このカナ読みテストはお互いが一番近くで対面するときである。

後期末のことであるが、法学部のある男子学生が音読テストを受けに私の部屋を訪ねてきたことがあった。他用で取り込み中だった私は「〇〇君だったかな、ちょっと待って下さい」と言ったのだが、そのとき彼から真顔で「名前で呼んでくれるのは先生だけです」と言われて

驚いてしまった。週一回の授業で150人以上の学生の名前を全て覚えるのは私にとってはほぼ不可能なことであるが、このテストのお陰でかなりたくさん学生の名前が頭に入ったことは間違いない。

3-3-3 学生の集中力を回復する

「カナ読みテスト」のもうひとつの役割は、その後に実施する「リズム読みテスト」(グループ)とともに、記号付けや和訳で疲れた学生の頭を休める役割を果たしていたことである。この課題に入る頃にはだいたい授業が始まって60分~70分が経過しており学生たちの疲労は極限に達しているが、それが声を出すことで緩和され集中力が再び蘇るのである。

しかもこの音読テストは読解が終わった後の残りの時間にに応じて様々のバリエーションが可能であるので、ほぼ毎時間に実施することができた。

残り時間 5分 → 読みガナ付けのための範読のみ (2~3回)

残り時間10分 → 上記の範読+「カナ読みテスト」のための音読練習

残り時間15~20分 → 上記の範読・練習+「カナ読みテスト」の実施

残り時間20~30分 → 「リズム読みテスト」の実施

ただこの音読テストはクラス人数が多いところでは、早く終わる学生と最後まで残る学生の時間差が大きくなりすぎるので、むしろ授業の最初に実施して早く終わったグループには視写プリントを渡して取り組ませ、一定の時間になったら読解に入る(あるいは映像資料を見せる)という組み立ても可能ではないかと最近は考えている。

実はこの「カナ読みテスト」の他にも寺島(美)実践と異なっていたところがあった。それは「通し読み」の実施方法である。次節ではそのことについて述べる。

3-4 「通し読みテスト」はグループで行う「リズム読みテスト」だった!

もうひとつの相違点は「通し読みテスト」の実施方法である。私はこのテストを「個人が全体を通して読むテスト」と思い違いをしていた。この思い違いは本論を書き進めているときに再読した新見(2009)で初めて気づいたのだが、この報告の中で新見氏は寺島隆吉氏の授業を記録し、その音声指導の発展段階を次のようにまとめている。なお、最初の「リズム読み/個人」というのは教師が範読して唱和させることや輪読させて練習させることを言っている。

最初わたしは「通し読み」というのはその名称から「全部（全段落）を通して読む」ものと決めつけて、それだけの分量をグループでリズム読みするのは不可能と思ったのだが、数段落であればさほど難しくはない。さらにこのテストは、学習者の状況に応じて数文ずつ「リズム読み」テストを行い、それから1段落分を「通し読みテスト」というパターンに設定し直すこともできる。つまり、読む分量を弾力的に設定することで、音声指導の要であるリズム読みの練習を段階的に無理なく、かつ集中的にたっぷり行うことができるのである。今回の私の追実践では寺島（美）実践と比べてリズム読みの練習量が格段に少ないことが明らかになったので、その教訓は次の実践に生かしたい。

いずれにしても、私はこれまで述べてきたようにほぼ毎時間「カナ読みテスト」「リズム読みテスト」を授業の後半に行い、最後にそのまとめとして「音読個人発表テスト」（＝個人発表による「通し読み」）を実施した。寺島（美）実践と全く同じようには追試できていないが、ただ実践の向かうベクトルは同じであったと思う。次節からはそのときの様子を報告する。

3-5 「恥ずかしさ」を乗り越えた105人

音読個人発表テストの実際の様子を報告する前に6クラス全体でどれだけの人数の学生がこのプレゼンに挑戦し合格したのかを以下に示す。私の読ませた英文の量は寺島（美）実践で行われた「47行音読プレゼン」と比べればわずかその三分の一にすぎないが、百人を超える学生に「前に出て英語を読む」体験をさせることができた。

| | | |
|-------------|------|---------------|
| 経営学部1年生①クラス | 3回実施 | 29人中23人合格（延べ） |
| 経営学部2年生②クラス | | 21人中19人合格 |
| 経営学部3年生③クラス | | 21人中11人合格 |
| 法学部1年生②クラス | | 34人中27人合格 |
| 法学部2年生③クラス | | 35人中14人合格 |
| 法学部3年生④クラス | | 11名全員合格 |

あるとき学生たちにこのようなプレゼンの体験をしたことがあるかを尋ねたところ、経営1年①クラスではわずかに一人、法学部3年④クラスにおいてはゼロだった。他のクラスでも推して知るべしの状況であると思うので、今回の実践は彼／彼女らにとっては貴重な体験であったと思っている。次節では上記の6クラスの中から経営学部1年生のクラスを取り上げて実践の様子を紹介する。

3-6 「音読個人発表テスト」評価方法の試行錯誤

この「音読個人発表テスト」をどのような評価するかについては、実践しながら軌道修正を重ねていった。この発表を最初に行ったのは週2コマの経営1年①クラスであった。1ページ分16行分を4つの段落に分けて「カナ読みテスト（個人）」「リズム読みテスト（グループ）」を行い、10月25日、26日に「16行通し読み発表」を実施した。

3-6-1 「二分以内で読む」という合格条件

私はこの16行の英文を自分で何度も読んでみて「2分以内」という合格条件をまず設定した。二分以内で読もうとすれば何度も通して読む練習をする必要があるし、その練習をする中でもう一度発音やリズムを復習できると考えた。また一方で、今回が最初のプレゼンであることから、「前に出て読めば点がもらえる」という評価も必要だと感じた。そのようにして考え出したのが次の評価基準であった。

- ・ 2分以内に読むことが最低合格条件。
- ・ 最高点は10点とする。
- ・ 各自の持ち点は9点とし、1点は教師の判断で加点する。
- ・ ミス1個で減点1点とする。
- ・ ただし、2点以上の減点はせず、7点は保証する

教師による加点については「リズム感がいいか」「意味が分かって読んでいるか」ということを念頭において設定したものであり、学生にはその旨を前もって知らせておいた。

1回目の発表では、トップバッターを自ら名乗り出る者はいなかった。そこで1番目は+2点、2番目は+1点を加えたところ、一番前に座っている井川という男子学生が名乗り出た。彼が名乗り出た後は数名の学生が次々とエントリーし最終的には12名が発表した。また翌日に実施した2回目の発表では再挑戦で合格した女子学生1名を含めて5人が合格した。挑戦はしたが2分の壁を乗り越えられず不合格となった者が1人、発表に挑戦できなかった者が10人いた。

3-6-2 分量を半分にして下限時間を設定

第二回目の発表は11月15日、16日に行ったが、前回の発表に挑戦出来なかった10名の学生に配慮して読む分量を半分の8行に減らした。また、評価基準についても若干変更を加えた。ひとつは、「50秒～70秒」という制限時間幅をもうけたことである。これは2分以内で読もうとするあまり早口になりリズム感が乏しい棒読みになってしまった者が数人いたので、下限時間を設定すればそれが改善されると思ったからである。もうひとつは、教師判断の加点を止め単

純に「持ち点10点・ミス1個減点1点、ただし7点保証」とした。

この変更によって、前回は発表しなかった10人のうち5人が初めてテストに挑戦して合格し、前回2回挑戦して不合格だった学生も合格した。ただ、制限時間幅を設けたことで発表者のリズム感がよくなったかという点必ずしもそうではなかった。やはりこれは、先にも述べたように、リズム読みの練習量が十分でなかったことに起因するのであろう。

3-6-3 よりシンプルな基準に——「2分、20点、ミス1個1点減点」

これまでの2回の発表を通してクラス29名中23名が一度は前に出て英文を読み上げたことになった。そこで3回目の発表は英文の量を1回目と同じ量に戻し、評価基準はよりシンプルに「2分以内、持ち点20点・読み間違いや言いよどみ一個1点減点、最低保障点なし」とした。

このときはまず最初に教師自身がテストにチャレンジして見せた。完璧な表現読みで満点を取るつもりだったのが、最後の方でひとつの単語を読み間違えてしまった。終わってから一番前に座っている女子学生に「どこ間違えたか分かる？」と尋ねると彼女は小声で「knew」と答えた。私は「先生は練習の時は完璧だったんだけど、でもやっぱり前に出ると上がるんだね。君たちが緊張するのも無理ないね」と話した。間違えて少し気恥ずかしかった私はさらに「もう少して無事に終わるのに最後に油断してしくじってはいけないという話が高校のときの古典に出てこなかった？」と尋ねるが誰からも返答がない。質問を發した私自身も思い出せずに宿題になってしまった。

私のプレゼンの後に10分間の練習時間をとったが、その時に、オーストラリアの高校を卒業した花田という男子学生が「先生、この単語（data）は「データ」と発音してもいいですか。むこうではずっとデータって読んでました」と尋ねてきた。彼は私がずっと「ディタ」と読んでいたので質問したのだ。私は「米国式の読み方だとディタだけど、英国式だとデータになる。オーストラリアは英国式だからデータだね。もちろんそれでもいいよ」と答えた。

練習タイムが終わりいよいよ発表になったが、この日は、私の意図しない失敗が逆に学生たちのプレゼンに対する心理的抵抗感を小さくしたのだろうか、第1次発表には7人が挑戦して時間超過失格1名を除いて6人が合格し、第2次発表では時間超過失格1名を除いて3人が合格した。井川は今回もトップバッターで19点、2番手の花田は19点で合格（私は思わず「僕より発音がいい」とコメント）、また先ほど私のミスを指摘した女子学生の藤田は満点だった。（コメント「僕も満点取るはずだったんだけど、悔しいね」）また、翌日の発表では前日の再挑戦者1名を含めて8人が合格した。

3-7 学生の目から見た音読発表

ここまでは教師の側から見た音読プレゼンの様子を記述してきたが、本節では学生の目から

見た音読プレゼンがどのようなものであったかを学生レポートを引用しながら見ていく。このクラスでは最終レポートの中に次のような問いを設けて自分の考えをまとめさせていた。

〈問1〉後期の授業では音声課題としてインタビュー記事の一部を音読しました。最初は「カナ読み」から始め、グループでの「リズム読み」を経て、最後はその締めくくりとして「通し読み個人発表（プレゼン）」（合計3回）に挑戦しました。あなた自身の取り組みの様子や、級友（あるいは教師）の発表を聞いての感想などを書きなさい。また、プレゼンの評価方法を次のように変えていきましたが、これについてはあなたはどう思いましたか。あなたの考えを書きなさい。

| | 読んだ分量 | 制限時間 | 得点 |
|-----|-----------|---------|----------------------|
| 1回目 | 1ページ(16行) | 2分以内 | 10点満点 7点保証 1点はリズムで加点 |
| 2回目 | 半ページ(8行) | 50秒~70秒 | 10点満点 7点保証 |
| 3回目 | 1ページ(17行) | 2分以内 | 20点満点 最低点保証なし |

3-7-1 「リズム読みテスト」における共同

リズム読みテストはグループ全員の声とリズム打ちが揃うことが合格条件となるために直接的な相互援助が生まれる。この共同の取り組みの中で苦手なものは一層の努力をするように追い込まれて自分を鍛え、得意なものは援助の手を差し伸べて自分のグループを合格に導こうとする。

以下に紹介する作文の中で最初のふたつを書いたのは、リズム読みに関してはあまり得意でない学生である。グループの他のメンバーに迷惑を掛けないように懸命に努力している様子を読み取ることが出来る。(なお、下線は筆者によるものである。)

リズム読みは本当に苦手でした。一定のリズムで読み、□が付いているところを意識すると先の文が見えなくなり、バラバラになったりと、とにかく大変でした。3人のグループでのリズム読みテストは、まずみんなに迷惑を掛けたくなかったので、練習しました。1人では大丈夫だと思って、いざ合わせてみると自分が先走ってしまい、まるで合いませんでした。テストでも自分ばかりミスをしてしまい足を引っ張ってしまったことをよく覚えています。(尾長)

グループでやるリズム読みでは発音が強くなる所でペンなどでリズムを取って正確に読まないといけない。そしてグループでやる事なので、一緒にリズム読みをやってもらう友達に迷惑をかけないように練習していたけど、私はなかなか上手くできないためにテストのときにミスをしてしまい、パートナーに迷惑を何度も掛けてしまっていたけど、諦めずに何度もやっているうちに、できるようになってきました。(福山)

また次の二人の作文からはグループ内で生まれたリーダーが他のメンバーをどのように導いているかや、援助してくれたリーダーに対して他のメンバーがどんな気持ちを持っているかが

分かる。

リズム読みは、スムーズに読まなければならない上に、強弱も付けなければならなかったのでも難しかった。プリントには強く読む所にマークが付いていたので、ボールペンでリズムをとりながら練習した。リズム読みのテストはカナ読みテストとは違って3人1組だったので、リズムを合わせるのが大変だったが、自分がグループの先頭に立ってしっかり練習したので何とか合わせる事ができた。(井川)

特に「リズム読み」では、だんだんとリズムが分かるようになりスラスラと読めていくようになる自分の成長を感じることが出来ました。私のグループの花田君はとても英語を話す能力が高いので、その花田君に読み方などを教えてもらうことが出来ました。私にとって花田君の存在はとても大きかったです。(川出)

最初の作文を書いた井川はプレゼンでいつもトップバッターを務めた学生である。またふたつめの作文に出て来る花田は3-6-3節で紹介した豪州の高校を卒業した学生である。

このように直接的な相互援助が起きるグループ単位のリズム読みテストと、個人で行う音読のプレゼンにおける相互援助のありようは当然異なってくる。次節ではそのことにも注目しながら、「リズム読み」から「音読プレゼン」の課題に学生がどのように取り組んでいったかを見ていく。

3-7-2 「難しいと思っていたことがどんどん身についてゆく楽しさ」

まず最初に、野山という女子学生の作文を紹介する。自分は音読が苦手だと思っていた彼女がどんな軌跡をたどって読めるようになってきたかが詳しく綴られている。

私は以前から英文を読むのが苦手で、強弱の付け方、発音、リズムの全てがわからずスラスラと読むことができませんでした。この講義での練習は、まずカナ読みで正しい読みを覚え、その次にペンでリズムを打ちながら強弱を感じて読むというように段階を踏んで進むことが出来たので、高校までのようにいきなり読むこともなく徐々に英文に慣れていくことが出来ました。

また、ただ読むだけでなく、読む文章もフレーズ訳をし、意味を理解した上で取り組んだことで、その文章の意図していることや場面、思いを感じながらつまることなく読むことがしやすくなりました。

最初のカナ読みはほとんどカナを付け、強弱を意識できるようになるまでにとっても時間がかかってしまいましたが、慣れてくるとカナをつけず強弱の記号も見ながら感情を込めるように意識して読むことが出来るまでになりました。

プレゼンについては、全員の前に出る緊張と、時間内に読み切らなくてはならないというプレッシャーで、練習どおりにいかない部分が出てしまっていました。1回目は初めてということもあり2分以内に読み終えることがなかなかできず、家で練習しないと追いつけない状況でしたが、2回目、3回目とかさねるごとにリズム、強弱、発音の全てに気をつけながら読めるようになったので、評価の仕方が変わっても、自分の今できる音読をしようと意識してできました。

彼女の発表はかなり緊張して読んでいるという印象があって「表現読み」にまではまだ到達していないように私には感じられたのだが、上記の文を読むと彼女が話者の意図や思いも込めて読もうとしていたことを窺い知ることができる。また、このようなステップを踏んで進めていく音読指導について、そこには「楽しさ」があると評している男子学生もいた。

私はこの3つの音読のシステムにより「英語を読む」ということについてのリズムというものの大切さ。そして発音良く読むことによる他人の聞き取りやすさの違い。そして何よりも何回も何回も練習をくり返すことにより難しいと思っていたことがどんどん身についていく楽しさ。このようなことがこの授業での音声パートでの作業を通して、また他人の発表や意見を聞いて私が感じたことのまとめであります。
(原口)

音読指導の第一ステップと位置づけた「カナ読みテスト」は寺島（美）実践においては行われていないものであったが、これらの作文を読むと「カナ読みテスト→リズム読みテスト→音読個人発表」の3ステップが学生のやる気を継続させて目標達成に向けて有効に機能していたことが分かる。

3-7-3 「世界にはいろんな英語を話す人がいる」

次の作文は3回目の発表で満点を取り、私が「僕も満点取るはずだったんだけど、悔しいね」とコメントした藤田の作文である。彼女が英語のなまり（地域変種）にまで気づくほどの実力の持ち主であることが分かる。

私は人前に出て発表することが苦手なので、結構きつい課題でした。でも英文の音読は好きな方なので、プレゼンの前には家で何回も練習しましたが嫌ではなかったです。中学生のときにもこれと似たようなことをした覚えがあります。このときは見て読むのではなく教科書の内容の1つのPart（1ページ分）の英文を覚えてきての発表だったので、それと比べると楽ではありました。

名前は覚えていないのですが、ハーフのひと（花田君？）の発表がすばしかったです。イギリス英語より（？）で聴きとりにくかったけど、ネイティブスピーカーほくってカッコよかったですし、うらやましかったです。ネパール出身の3人のアクセントは独特で、そして早くしゃべるので聴きとりづらかったです。でも世界には色んな英語を話すひとがいるので、それに慣れるためにも、いい勉強になりました。（後略）

中学時代に英文を暗唱して発表したことがある彼女にとっては音読だけの課題は「楽で」はあったのだが、それでも家で何回も練習している。このことはこの課題が易しそうには見えるが同時にやりがいのある課題であることの証左ではなからうか。なお、彼女は中間レポートで「単語テストをやってほしい」という要望を書いてきて、それに対して私は「テストをやって使わなければすぐに忘れてしまう。興味ある英文をたくさん読んだほうが良い」と授業で返

答していたが、この要望はフレーズ単位の視写プリントを使うことで叶えられるのではないかと考え、翌年から授業に導入することになった。

3-7-4 「もっと気持ちを込めて読まなければいけない」

次の作文は、前節の藤田の作文の中で「イギリス英語よりで聞き取りにくかった」と評されたオーストラリアの高校出身の花田の作文である。彼の発音はさすがにとってもきれいであるが、流暢なあまり少し早く読み過ぎるきらいがある。私はもう少し聞き手を意識して読めるといいと思っていたのだが、彼自身もそのことには気づいていたようだ。

この音読のプレゼンをやって、みんなの前でプレゼンをやるといのは、とても緊張しました。緊張すると普段の力があまり出せなかったような気がしました。

自分の直さなければならぬと思ったところは、音読するときに、もっと気持ちを込めて読まなければいけないと思いました。そうすれば音読の内容をみんなに伝わりやすくなると思いました。

級友の発表を聞いて、みんな上手だなと思いました。でもやっぱり誰でも緊張するんだと思いました。

先生が音読したときは、気持ちとかもこもっていて、あまり緊張しているようにも見えませんでした。さすが先生だなと思いました。自分も音読を気持ちを込めてできるように頑張りたいです。(後略)

2回目の発表で下限時間を設定したのは、実は彼の音読が少し早すぎるのが気になったからであったのだが、そのような設定をするよりもむしろ教師が発表後に「聞き手を意識してもう少しゆっくり読むとさらによかったね」とアドバイスすれば済むことだったと後になって気づいた。

3-7-5 恥ずかしさを乗り越えて得る充実感

4人目の作文はいつも藤田と一緒に最前列に座っていた福山という女子学生の作文である。彼女は発表時の気持ちやその後の思いを次のように綴っている。

プレゼンでは、皆の前で発表するのはとても緊張しました。また、制限時間が決められていて読む早さを考えなくてはいけなくて、タイマーを使いながら時間内に読めるように努力しました。特に3回目のプレゼンでは制限時間が2分以内で文章が17行もあって、難しい単語もいくつかあり、できるか心配でしたが、先生や友達の発表を聞いていると、時間に余裕もありこのペースで読めばいいんだということが分かり、おちついて読むことができました。でも、途中で早くなったりつまずいたりしましたが最後まで読めたことが嬉しかったです。

また、友達のプレゼンの発表を聞いていると、アクセントが強くつけられていたり、大きな声で言ったりとても聞きやすかったです。私も、もう少し大きな声で言えればよかったなと後悔しています。プレゼン発表で20点とりたかったです。後期の授業でプレゼン発表をやったことで少し自分に力がつきました。皆の前で話すことはとても緊張しますが、とてもよい経験になりました。またどこかで、プレゼンをやる

機会があれば是非やりたいです。

このように緊張するのは女子学生だけではない。ある男子学生も発表前の胸の高鳴りを、そして読み切ったときの感動を次のように語っている。

通し読みの個人発表はとてもイヤだった。最初、他の人の発表を聞く感じ、読むだけだし簡単だろうとさえ思っていたけれど、自分の番が近づくにつれて、だんだんドキドキしてきて、いざ前に立ってみると、本当に読めるだろうかと思ってしまうほど緊張した。それをふまえた上で家で練習してきても、やっぱり本番は練習通りにはいかなかった。でも社会でも人前で立って話すことは、必要となってくるし、やること自体には意味があったと感じる。確かに個人発表はイヤだったけれど、読み切ったときの達成感はずごかった。(高見)

彼らが勇気を持って乗り越えた「恥ずかしさ」の向こう側には、「是非またやりたい」という前向きな気持ちや「達成感はずごかった」という充実感が生まれていることが読み取れる。

3-7-6 「練習すればすらすら読めるけど、・・・」

ここまではこのプレゼンに挑戦した学生のレポートを取り上げたが、本節ではそれに取り組まなかった学生の気持ちにも着目する。そのような学生は全部で6人いたのだが、このうちレポートを書いている4人の作文を全て紹介する。不思議なことは、彼／彼女らの気持ちも、発表にチャレンジしたものと同様に、前向きに変化していることである。

1人で発表するというのはあまりやったことがなかったので、こういう機会でもやらなかったというのは、非常にもったいないことで少し後悔しています。(中略) 友達の発表を聞いていたときは、すごいなと思いましたし、すごく積極的にプレゼンしようとするひが多くて、そういうところを見習いたいと思いました。(畑)

通し発表個人読みについては、練習をおこたっしまい発表することが出来ませんでした。これは、自分の取り組みが悪いせいなので、次の時からは、しっかりと発表出来るようにしたいと思います。／級友あるいは教師の発表を聞いて、とても発音がいい人がいると感じました。(茂野)

皆、スラスラ読めてすごかったです。私は英文を読むのが苦手でもまだ1回もやったことがないので、もっとしっかり練習して1回くらいは頑張ろうと思いました。(日比)

級友の発表を聞いて、みんな最初の時と比べて、とても上手になっていると感じました。自分自身は、練習すればすらすら読めるけど、初めて読む所は、まだつかえたりします。初めてとか関係なく最初からすらすら読めるようになりたいです。(中山)

どの学生の作文においても共通することは、彼/彼女らが、級友の発表を聞いて、その「積極性」「発音のよさ」「スラスラ読めること」「とても上手になっていること」に大きな刺激を受けて、「見習いたい」「次の時からは、しっかり発表できるようにしたい」「もっとしっかり練習して1回くらいは頑張ろう」「すらすら読めるようになりたい」という前向きな気持ちになっていることである。出来なかったことで落ち込むのではなく、今度は自分もやろうという気持ちに変わっている。

このような気持ちはどうして生まれてくるのであろうか。それは「やらなかったことはもったいない」「練習をおこたってしまい発表することが出来ませんでした」「もっとしっかり練習して1回くらいは頑張ろう」「練習すればすらすら読める」という記述からも分かるように、彼/彼女らが、実際にはやらなかったのであるが、この課題は自分も努力すれば出来ると思っているからではないだろうか。つまり、この課題は彼らにとっては「出来なかった」のではなく「やらなかった」課題になっているのである。これが「暗唱せよ」という課題⁽³⁾であれば端からやろうとする気持ちは湧いてこなかっただろう。

3-7-7 簡単そうに思えるが、達成しようとすれば相当の努力が必要

つまりこの音読課題は、これに取り組まなかった学生も含めて、ほとんど全員が「練習すれば自分も出来そうだ」と考えているのである。「最初、他の人の発表を聞く感じ、読むだけだし簡単だろうとさえ思っていた」（高見）という感想からも分かるように簡単にすら思えるのである。

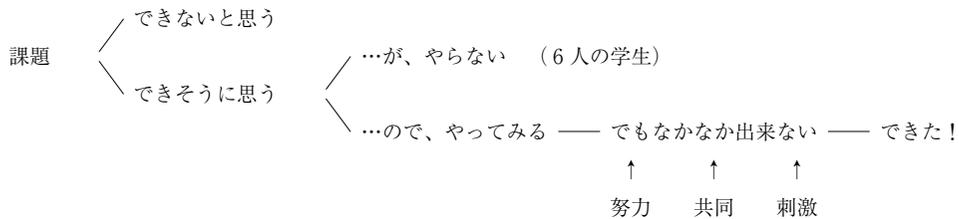
ところが、いざやろうとするとそう簡単にはできない。「家で練習しないと追いつけない」「何回も何回も練習をくり返す」「プレゼンの前には家で何回も練習しました」「タイマーを使いながら時間内に読めるように努力しました」「家で練習してきても、やっぱり本番は練習通りにはいかなかった」といった学生の声がそのことを示している。

つまりこの課題は学生をその達成に向けて努力し続けたいと思わせる易しさと難しさを同時に合せ持つ課題なのである。そしてその過程においては、級友の上手な発表を聞いて刺激を受けたり、あるいはまた級友が緊張する様子を見て「自分だけではない」と安心したりしている。そのことから、級友相互の直接的・間接的援助の両方が彼らの「やれば出来る最も困難な課題」の達成に貢献していることも読みとれる。

これまで述べてきたことをまとめると次のような図になるだろうか。「できそうに思ったが、

(3) 英文の暗唱に関しては、寺島(美)(2009:30)に、リズム読みは「暗記しないので暗記してしまう」という逆説的なフレーズがある。暗記しようとするれば、それと同時に英語音声の基本構造である強弱のリズムまで意識して読むことは難しい、ところが暗記しようと思わずにリズムで読む練習を積み重ねていくうちに(この練習は楽しいので続けられる)、結果として暗記に到達するのである。このことを寺島隆(2007:145-146)は「見える学力」をつけるにはまず「見えない学力」を養うことが必要であると述べている。英語の暗唱にあてはめてみれば、「暗唱力」という「見える学力」をつけるためにはその力を陰で支えている「リズムで読める力」を養う必要があるということである。今回の学生のレポートにおいては「覚えてしまった」とか「口について出て来る」といったような感想を書いているものまではいなかったが、これまでの韻文のリズム読みにおいてはこのようなことはしばしば起きている。

やらなかった」6人の学生たちが次の機会にはこのプレゼンに挑戦してくれることを期待したい。



4 まとめ——仲間との共同の中で新たな能力を獲得した学生たち

本論ではまず本実践の元となった寺島（美）実践の概略を紹介し、次に筆者が追試した実践を、その前半は教授者が書き留めた授業記録として、その後半は学生レポートを紹介・分析する形で記述した。

本実践は、追試対象となった寺島（美）実践と比べるとリズム読みの練習量がかなり少ないという相違点を持つてはいたが、「カナ読み」「リズム読み」「音読プレゼン（通し読み）」という音声指導プロセスはそれなりに有効に機能し、学生に「難しいと思っていたことがどんどん身について行く楽しさ」（原口）を体験させてやることができた。

また学生のレポートを分析する中で、学生間相互の援助がさまざまな形で行われていることも確認でき、彼らが仲間との共同の中で「発達の最近接領域」に到達し、新たな能力を獲得していったことも分かった。そしてその能力とはただ英語音声の獲得だけにとどまらず、「人前に立っても怖じけずに話す」という人間力の獲得をも含むものであったと筆者は考えている。

最後に本論のテーマとは直接に関係はないが、プレゼンの評価方法について少し補足する。寺島（美）実践と山田追試を比較すると、前者においては、制限時間は特に定めず評価は大まかに「○」「◎」としているのに対して、後者は「制限時間設定」「持ち点減点法」「最低点保証」といった方法を採用している。本来、評価というものは「序列化のためではなく学習意欲を引き出すためのものである」（寺島隆2002：117）という観点から考えると、「減点法」は出来たところを伸ばすのではなく出来なかったところに着目する評価方法である。また減点の対象とした「発音ミス」「言いよどみ」は発表の一側面にすぎず、リズム感、緩急、抑揚、表現などの要素は評価対象から捨象されている。では、どのような評価をすれば、その発表を正しく評価し、次への学習意欲に繋がるものとすることができるのか。寺島（美）実践における評価方法も参考にしながら今後の実践の中で検証していきたい。

引用文献

- DemocracyNow!* 20110307 Michael Moore Joins Wisconsin Labor Protests: "America Is Not Broke"
- DemocracyNow!* 20110426 Chernobyl Catastrophe: 25th Anniversary of World's Worst Nuclear Accident
- 藤井健三 (1986) 『現代英語発音の基礎』 研究社出版
- 新見明 (2009) 「リズム読みワークショップ—「リズム読み」から「表現読み」へ」『JAASET メルマガ2009年 8月号』
- 寺島隆吉 (1986a) 『SINGING OUT』 1-2 三友社出版
- 寺島隆吉 (1986b) 『英語にとって「授業」とは何か』 三友社出版
- 寺島隆吉 (1996a) 『ロックで学ぶ英語のリズム』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (1996b) 『キングで広がる英語の世界』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (1996c) 『チャップリン「独裁者」の英音法』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (1997a) 『チャップリン「表現読み」への挑戦』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (1997b) 『ロックで広がる英語の世界』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (1997c) 『キングで学ぶ英語のリズム』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (2000) 『英語にとって「音声」とは何か』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (2002) 『英語にとって「評価」とは何か』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (2007) 『英語教育原論』 明石書店
- 寺島隆吉 (2007) 「英語教育の水源地を求めて—逆転発想の英語教育」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』 第56巻 第1号 141-152頁
- 寺島美紀子 (2009) 「Dramatic Readingの授業構築—AV教室・無線LANを利用した大学における英語授業実例」『情報学研究』 第18巻 1-37頁
- ヴィゴツキー、レフ・セミヨノビッチ (2001) 『思考と言語』 (新訳版) 新読書社
- 山田昇司 (2008) 「全員参加の「読解」と「音読」の英語授業—LL教室の機能を生かして」『情報学研究』 第17巻 1-18頁

(Accepted November 30, 2012)

DR. JANETTE SHERMAN :

<資料>

1

Well, we clearly need, as a society, to say no to nuclear power, because there is no way to control it. || And as Dr. Patterson points out, these catastrophes will continue, and we can't— we, simply, as a world society, can not deal with them. || When a nuclear reactor explodes, the radiation goes around the entire hemisphere. ||

そうですね 私たちは明確に必要です、 社会として ノーと言うことが 原発に なぜなら 方法がないからです
それを制御する方法が。 そして パターソン博士が指摘されているように このような大災害はこれからも起こるでしょう
そして私たちは できません 私たちはただ 国際社会として それらに対処できないのです。
原子炉が 爆発すると 放射能はおおいます 北半球全体を。

2

It is not confined to where the people live— or where the accident occurred. || The effects are ubiquitous across all species: that's wild and domestic animals, birds, fish, bacteria, viruses, plants and humans. || So the effects are extremely serious, and they last for generations. ||

それは閉じ込めておけません それは人々が住んでいるところに あるいは事故が起こったところに
その影響は 至る所にるのです あらゆる種に 野生動物も 家畜も
鳥も 魚も バクテリアも ウィルスも 植物も 人間にも。 だから その影響は とても深刻です
そしてそれは続くのです 何世代も。

3

We're terribly concerned about Belarus, where only 20 percent of the children are now considered healthy. || So, what do you do with a society if 80 percent of your population is sick? || Who are going to be the artists and the musicians and the scientists and the teachers, if your population is not well? ||

私たちはひどく心配しています ベラルーシについて ここでは 20パーセントの子どもだけが いまでは
健康だと考えられています。 だから 社会をどうするのでしょうか もし80パーセントの人々が
病気だとしたら。 いったい誰がなるのでしょうか 芸術家や 音楽家に 科学者や
先生に もし 人々が健康でなければ。

4

We need to stop the use of nuclear power. || We have other sources: conservation and solar and wind and biofuels. || We need the population to rise up and say, "No more nuclear." || It's not going to work, and it will just be a matter of time before there's yet another accident, such as occurred— is occurring at Fukushima Daiichi. ||

私たちは止める必要があります 原発の使用を 私たちには他の資源があります 節約と 太陽エネルギー
風力と バイオ燃料です。 私たちには必要です 人々が 起ち上がって 言うことが 「核はいらない」と。
それはもう役に立たないでしょう そして それは ただ時間の問題でしょう また別の
事故が起きるのは 起こったように いままだ進行中です 福島第一では。